



◆環境課
☎ 587 - 6003
FAX 587 - 3834

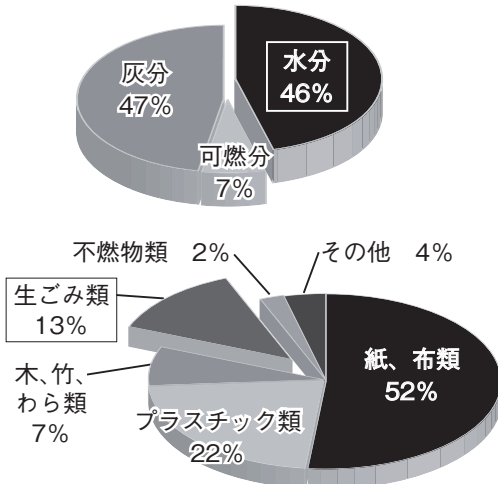


どうしていますか？ 生ごみ処理

■生ごみを出すときは水切りを！

皆さんは燃えるごみの重さの半分近くを水分が占めているのをご存じですか。その量は年間約3200t、25mプールに換算すると10杯分近くにもなります。その大半が、野菜くずや肉、魚の切れ端など、毎日のように台所から出る生ごみによるものです。水分を含んでとても重くなった生ごみの回収にガソリンを使い、さらに、焼却や灰の埋め立てにも多くのエネルギーが使われています。生ごみを出すとき、水分をしっかり切ってから出すことで、悪臭の防止だけでなく、地球温暖化防止にも貢献できます。

燃えるごみの成分 (H16～22平均、重量比)



燃えるごみの内訳 (H16～22平均、容積比)

■生ごみは優良な資源です！

生ごみ処理容器等を使つて、さらに生ごみ減量にチャレンジしてみよう！
市内では、家庭はもちろん地域ぐるみで生ごみの資源化

に取り組んでいる事例もあります。

例えば：

○コンポスト容器で

自宅の近くに畑がある人にお勧めなのがコンポスト容器です。微生物の力によって生ごみを分解・肥料化します。

○段ボール箱や木箱で

パーク堆肥にもみ殻、米ぬかなどを混ぜ、細かく切った生ごみを投入します。空気を含ませるように、よくかき混ぜるのがコツです。

○市販の手動式(機械式)生ごみ処理機で

電気を使わずにかき混ぜ、

微生物や酵素のはたらきで生ごみを分解します。

その他、市環境基本計画に基づく生ごみ資源化プロジェクトでは、「家庭でできる生ごみ堆肥化実践マニュアル」を作成しています。希望者は環境課にお問い合わせください。

■生ごみ減量化推進補助金

市では、生ごみの減量に大きな効果がある生ごみ処理容器等の購入者に対し補助金を交付しています。

対象者：市内在住者※過去に補助金の交付を受けていない人

補助対象：コンポスト・密閉容器・機械式(非電気)の生ごみ処理容器等※1世帯2台まで
補助額：購入金額の2分の1(1台につき上限3000円)

※先着順で受け付け、予算がなくなり次第締め切ります。

申請：領収書(商品名、型式、氏名の記載があるもの)、印鑑、振込先口座番号のわかるものを持参の上、環境課または市民サービスセンターで手続きしてください。

※必要に応じてカタログ等の資料提出をお願いする場合があります

毎月第4土曜は 廃食油回収の日

5月26日(土) 午前10時～正午

回収会場：市役所別館横電話ボックス付近
回収物：廃食油、牛乳パック、アルミ缶
問環境課 ☎ 587 - 6003、エコロジーマーケットやすの会・増村 ☎ 586 - 1441

歴史の小窓

—学芸員のメッセージ—

(92)

歴史民俗博物館

☎587-4410、Fax587-4413

【休館日】月曜日、5月1日(火)

◆春期企画展「平家物語と祇王—妓王寺と祇王井—」／6月10日(日)まで 講座・展示解説…5月12日(土)午後2時～4時

◆写真展「祇王井を訪ねて」／6月10日(日)まで 1階ロビーにて

◆小堤山城を登る／5月10日(木)午後1時～4時 ※先着30人(電話申込)、雨天中止

◆赤米田植え／5月19日(土)午後2時～4時 参加費…無料／申し込み…電話にて同館

祇王井の流れ

『平家物語』に登場する祇王(妓王)は、都で評判の白拍子(舞姫)として描かれています。祇王は平清盛の寵愛をうけますが、最後には清盛のもとを去り、出家して往生を遂げるといふ悲哀の物語の主人公です。野洲には、この一話とともに「祇王井」の伝説が伝えられています。

祇王は、近江国野洲郡江辺莊(現在の野洲市永原・中北・北付近)に生まれ、故郷の人々が水不足に苦悩していたため、清盛に願い出て用水を開いたと伝えられています。

す。この用水は、祇王の恩恵をたたえて「祇王井」と名付けられました。中北の妓王寺は、浄土宗の尼寺で、祇王らの菩提を弔うために建立されました。

祇王井は、野洲川を水源とし、三上地先に始まり、富波乙の生和神社裏で東西に分かれます。東祇王井は、富波甲の町並みの東裏手を通り、永原へと流れます。西祇王井は、中之池川と一体になり、童子川に合流します。そして下手で再び合流し、琵琶湖野田浦へ注いでおり、約三里(12km)

に及ぶ古くからの用水です。条里制地割(古代～中世の土地区画)に沿う所が多く、人工の用水として開削されたものです。近年は「祇王井川」と呼ぶことも多くなりましたが、用水のことを「ユ」または「イ」といい、江戸時代の記録に見られるように、古来は「祇王井」と呼びならわしています。

祇王井の水利にかかわる村々は、江辺莊三か村の永原(上町・下町・江部)・中北・北のほか、四ツ家野洲の内・行合(行畑の内)・市三宅・久野部・五之里・澤(富波乙)・新町(富波甲)の七か村を加えた十か村です。

祇王井にかかわって、これらの村々が毎年つとめてきた行事があります。3月15日は、用水が完成した日と伝えられています。祇王井は、今は野洲川幹線水路から水を引きますが、「ユモト」のかつての取水口付近に「水源地跡」の碑があり、ここに十か村の自治会長が参集し、妓王寺住職が法要を勤めます。

4月上旬の「ユノボリ」では、春先の田植え前に、三か村が用水をさかのぼって見回りや川浚(さらい)をします。7月23日には、三か村の役員が妓王寺に水利関係の文書を持ち寄る「虫干し」があります。現在は、これらの行事はおのこの直近の日曜日等にされています。また、8月25日の祇王の命日には、十か村が妓王寺に参り、法要が勤められます。

野洲郡北村(現・野洲市北)出身で、江戸時代の俳人・歌人である北村季吟も、故郷の祇王井のことを詠んでおり、句碑が北自治会館前に建てられています。

祇王井に

とけてや民も

やすこほり

この句は、句集『続山井』



水源地跡での法要(七間場自治会館横・2001年撮影)

に「解氷」(とくるこおり)の題で収められ、「こほり」は「氷」と野洲郡の「郡」の意を掛けています。祇王井にとけこむように慣れ親しんでいる人々のことが想い起こされます。

長い歴史をもつ用水「祇王井」は、今日も田畑を潤し、地域の人々の手で大切に守られています。その流れは、かけがえない恩人、祇王の伝説とともに伝えられていくことでしよう。

(博物館学芸員 行俊勉)